

Nunc Licet 「今、許された」

「NUNC LICET」これは、知的に信仰の秘義に入ることが、今許されたことを意味します。真のキリスト教 508

「私は、××の存在を信じています」とある科学者が述べます。××の存在の有無は、仮説と言われ、その科学者は、客観的データを集めて、仮説が正しいことを証明しなければならず、同じ手法で、同じ結果が再現されなければ、その仮説は、自然科学の世界では正しいとはされていません。また自然科学は、絶えず仮説であり、反証される可能性も持っていなければなりません。自然科学は、真理を追い求めはするが、決して真理には到達できない宿命を負っています。当時の専門家の中でもっとも支持を受けた「仮説」が真理と呼ばれます。飛行機は今や毎日のように数十万機も空を飛んでいます、飛行の基本的原理とされている翼に働く揚力の存在さえ、自然科学の論理においては有力な仮説にしかすぎません。

自然科学は自然の源や原理を物質的に求める形而下の学問と言えますが、ギリシア時代の科学の中心であった哲学は形而上の問題にも及び、知性や理性、論理によって、宇宙の構造や根源、神の存在などを論じ、様々な説が生まれますが、これも仮説であり、それぞれの時代に最も支持されたものが、当時の支持者によって真理と呼ばれます。

宗教においてはどうか？宗教的真理、あるいは信仰の真理の存在は、何をもって真理であるとされるのでしょうか？この点、今までのキリスト教会は、「信仰のみ」に焦点を当てていました。神は存在されるのか、人は救われる存在なのかどうか？ただ信ぜよ、信じる者は救われる、と説きます。父・子・聖霊は三人にして一つの存在、信仰の真理は奥深く、とても理解しうるものではなく、ただ信じるしかない、と述べます。その「信仰のみ」は不思議なことに日本仏教でも同じ流れを迎えます。愚かな大衆は、仏の深い知恵を知ることができない、ただ信じ、南無阿弥陀仏、南無妙法蓮華教と題目を、繰り返し一心に唱えよ、という流れがあったと歴史の教科書は述べます。

真理そのものではなく専門家集団の中での仮説の人気投票でしかない科学、そして真理の本質を考えることなしに、人が言ったから、あるいは、自分が救われたいから、それを受け入れる消化されない知識、信仰のみの宗教。これらは教育水準が高まり、様々な意見が飛び交う現代において、人の道標となりうるのでしょうか？道標としての価値が多様化しすぎて何が大切かを見失えば、社会の基礎を失い、現代社会がどの国においても行きづまるのも、なんとなくわかるような気がします。価値観が多様過ぎて、人様に迷惑さえかけなければ、どれでも良いだろう、あるいは、宗教はただの思い込みにしか過ぎないと言われても反論する術はなく、データがおかしく、仮説は証明できないといわれ、支持を失うと、当の本人も、最終的には目を閉じて「私は信じる」というしかありません。

本物の真理、形而下も形而上界も含む真理にはどうすれば至ることができるのでしょうか？人が人たる所以となっている知性あるいは理性によって、真理に至ることはできないのでしょうか。それとも知性

や理性は、人生を昏くしてしまう余計なものなのではないでしょうか。

人智によって得る「真理」は、不純な動機、悪の動機が隠れている以上、その悪に見合った偽りにしかたどり着きませんが、自分が考えるため、自分のものとなりやすい性質を持っています。また、しかし、啓示によって与えられた本物の真理は、人智とはるかな距離があり、そのままでは未消化の知識としてしか扱われず、自分のものとはなりません。未消化の知識と、知的・理性的な力、これを結びつける力があります。

「その日、エジプトからアッシリヤへの大路ができ、アッシリヤ人はエジプトに、エジプト人はアッシリヤに行き、エジプト人はアッシリヤ人とともに主に仕える。

その日、イスラエルはエジプトとアッシリヤと並んで、第三のものとなり、大地の真中で祝福を受ける。万軍のエホバは祝福して言われる。『わたしの民エジプト、わたしの手で作ったアッシリヤ、わたしのものである民イスラエルに祝福があるように。』」（イザヤ19:23-25）

「イスラエル、アッシリヤ、エジプトは教会の人間の三つの機能を意味し、霊的なものと合理的なものと知識を指します。・・・人間の合理性は知識によって形成され、合理性も知る機能も、主から天界を通してくる霊性に由来します。」（黙示録解説340-18）。未消化の知識は、知性や理性によって、合理的なものに高められ、自分のものとされねばなりません。そして、それは主からくるものでなければなりません。

天界の教えは、「もし理性に諮るならば、教義は滅びてしまうので諮ってはならない。しかし、合理的そして自然的善と真理の双方によって信仰の教義は富む」（天界の秘義2568）と一見矛盾したことを語りますが、理性に諮ってはならないという前者は、真理や教義に対して頭から否定的に考える人につき言われ、後者は、肯定的に考える人に対して言われます（同上）。そして、肯定的な部類に属する人であれば、才能や知識があれば、より賢明になることができます。記憶知によって合理的機能を伸ばすことは禁じられてはいませんが、御言葉に属する信仰の真理に反することを確認することは禁じられています（II 2588-9）。

主からくる合理性によって主を否定するなら、合理性自体は破壊されてしまいます。

神様や死後の世界、救い、天界という信仰の真理に、まず肯定的であることが、理性・知性を使う際の前提となります。少なくとも真っ向から信仰の真理に反対するなら、その後の進展は望めません。すなわち、真っ向から信仰の真理を否定するために理性を使うことは許されておらず、そのような人に出会ったら、理性や知性を使ってこれを確認しないように、深入りせず離れたほうが、その人のためになります。

肯定的な人が、合理的な推論を用いるなら、恵まれます。

「新教会においてはその逆のことが起こります。この教会では、自分の知性を使い教会のすべての神秘に進み、深く入ることが許され、発見したことを御言葉によって確認することが許されています。」（真キリ508）

合理性は主から天界を通してくるものだからです。自らのために使う詭弁は合理性ではありえません。

「主・仁愛・信仰が一つとなっていることは、人の中で、生命・意志・知性が一つとなっているようなもので、もしそれらが分離されると、そのそれぞれは一個の真珠が崩壊して塵になるように破壊されます」(真キリ362)。

信仰だけを抱いていても、仁愛のかけらもないなら、信仰は絵にかいた餅であり、何のための信仰か意味がありませんし、信仰と仁愛は主からきます。また仁愛だけを行っても、それは自然的な起源となり、霊的なものとなりません。すなわちその仁愛の動機は、不純なあるいは自然的なものが混ざっています。主の存在を知っていても、どのようなお方で、この地上におられたならどのようなことをなさるお方か、そして主から信仰と仁愛を受けて自分のものとしなければ、これも無意味です。そのため主・仁愛・信仰は一つで不可分、どれか一つを分離するなら、人の内のそれぞれすべてが破壊されます。

知性を高めると、育ち見えてくるものがあります。それは第三界の天使が手にしている書に『・・・その個々の真理のすべては主を映す鏡である』と描かれているように、主の御姿が見えてきます。そこで見えてくるのは、よく飾られているような、なぜか白人の長髪青年風に描かれた主のポートレートではありません。愛と知恵そのものである本物の主です。

記憶すべきことにある神殿の「今許された」と書かれた扉は、真珠によってできており、天から降りてくる聖なる都、新しいエルサレムの門も「門のそれぞれは一つの真珠」(黙 21:21) でできています。この真珠は、主の承認と知識、を意味します。「主の承認と主の知識が、御言葉からのあらゆる真理と善の知識を結びつけ一つとし、教会に導入します」(黙示録啓示 916)。福音書にある「商人が、全財産を売り払って買った美しい真珠」(マタイ 13:45) も、主の承認と知識のことを意味しています。真珠貝は、外からの異物を核として、体内で育て上げて真珠とします。それと同じように、最初は外から入ってきた「主こそ天地の神である」等の、自分のものではない異物を、承認し、抱き、それを様々な知識によって囲み確認することで、美しい真珠が育ち、教会へ導き入れます。

知性を高めてゆく過程で、主の真の御姿を確信しそれを育てることが、新教会に入る扉となります。主ご自身が扉であることは、主はご自身をドア、門と呼ばれ(ヨハネ 10:9) ていることからわかります。

また、純粋に知的興味だけで、信仰の秘義を得ることができるかという、そうではありません。信仰は知識によって成立しているわけではなく、知的興味だけで追い求めても限界にぶつかります。信仰の元となる真理は、真理がそのものとして存在しているわけではなく、真理を存在させるもの、愛すなわち主ご自身がなければならぬからです。

真のキリスト教で描かれた神殿は、正方形をしています。また黙示録の新しいエルサレムも「都は正方形で、その長さとは幅は同じです。長さとは、善であり、幅とは真理であり、善と真理が等しいとき、そこに公正があります。(黙示録啓示905)

真理に応じた善、善に応じた真理、これが新教会を構成しています。善に応じない真理、真理だけを学んでもそれが善に結びつかない真理は、いびつな形となり、新教会とはいえません。主から真理を学ぶとき、それと等しいだけの仁愛とします。御言葉の内意を知っている、というだけでは価値はなく、それはいずれ奪われて

無くなってしまいます。

「信仰の形成は、人が主に近づき、御言葉から真理を学び、真理に従って生きてゆくことでなされます」（真キリ347）。主に近づかないで、真理のみを取り上げて議論し、あるいは真理に従って生きてゆかなければ、相応の知識を集積し倉庫のように蓄積し続けた古代教会の一つであったエジプトとなんら変わることがありません。

自然科学は、仮説を立ててデータによって真理を論証しようとしませんが、真理自体は永遠につかめません。「信仰のみ」の宗教は、理解できないものをただ信じる盲目的信仰で自分のものとするには難しいとしかいえません。しかし新教会の真理は、同時に同じだけの仁愛を主から行うことで、実在が証明することができます。

黙示録21章にある「子羊のいのちの書に名が書いてある者」とは、主を信じ、御言葉の主の命令に従って生きる者のことです（黙示録啓示925）。御言葉から真理を学び、知性を高め、十戒をはじめとする主の戒めを守り真理に従って生きてゆくことで、はじめて新教会の中に入ることができます。

「しかし、すべて汚れた者や、憎むべきことと偽りとを行なう者は、決して都には入れない。小羊のいのちの書に名が書いてある者だけが、はいることができる。」（黙示録21:27）

アーメン

イザヤ19:23-25

その日、エジプトからアッシリヤへの大路ができ、アッシリヤ人はエジプトに、エジプト人はアッシリヤに行き、エジプト人はアッシリヤ人とともに主に仕える。

その日、イスラエルはエジプトとアッシリヤと並んで、第三のものとなり、大地の真中で祝福を受ける。万軍の主は祝福して言われる。「わたしの民エジプト、わたしの手をつくったアッシリヤ、わたしのものである民イスラエルに祝福があるように。」

27:13

その日、大きな角笛が鳴り渡り、アッシリヤの地に失われていた者や、エジプトの地に散らされていた者たちが来て、エルサレムの聖なる山で、主を礼拝する。

黙示録21:10-27

そして、御使いは御霊によって私を大きな高い山に連れて行って、聖なる都エルサレムが神のみもとを出て、天から下って来るのを見せた。

都には神の栄光があった。その輝きは高価な宝石に似ており、透き通った碧玉のようであった。

都には大きな高い城壁と十二の門があって、それらの門には十二人の御使いがおり、イスラエルの子らの十二部族の名が書いてあった。

東に三つの門、北に三つの門、南に三つの門、西に三つの門があった。

また、都の城壁には十二の土台石があり、それには、小羊の十二使徒の十二の名が書いてあった。

また、私と話していた者は都とその門とその城壁とを測る金の測りざおを持っていた。

都は四角で、その長さとは幅は同じである。彼がそのさおで都を測ると、一万二千スタディオンあった。長さも幅も高さも同じである。

また、彼がその城壁を測ると、人間の尺度で百四十四ペーキュスあった。これが御使いの尺度でもあった。

その城壁は碧玉で造られ、都は混じりけのないガラスに似た純金でできていた。

都の城壁の土台石はあらゆる宝石で飾られていた。第一の土台石は碧玉、第二はサファイヤ、第三は玉髓、第四は緑玉、

第五は赤縞めのう、第六は赤めのう、第七は貴かんらん石、第八は緑柱石、第九は黄玉、第十は緑玉髓、第十一は青玉、第十二は紫水晶であった。

また、十二の門は十二の真珠であった。どの門もそれぞれ一つの真珠からできていた。都の大通りは、透き通ったガラスのような純金であった。

私は、この都の中に神殿を見なかった。それは、万物の支配者である、神であられる主と、小羊とが都の神殿だからである。

都には、これを照らす太陽も月もない。というのは、神の栄光が都を照らし、小羊が都のあかりだからである。

諸国の民が、都の光によって歩み、地の王たちはその栄光を携えて都に来る。

都の門は一日中決して閉じることがない。そこには夜がないからである。

こうして、人々は諸国の民の栄光と誉れとを、そこに携えて来る。

しかし、すべて汚れた者や、憎むべきことと偽りとを行なう者は、決して都には入れない。小羊のいのちの書に名が書いてある者だけが、はいることができる。

真のキリスト教 508. 記憶すべきこと 第六:

ある日、私に壮麗な神殿が現れました。その形は正方形で、屋根は冠のようであり、表面のアーチがまわりを巡り高まってゆきます。壁は連続したクリスタルの窓でできていて、扉は真珠のようなものでできています。内部の南西方向には、大きな説教壇がそびえ、その上には右側に御言葉が開かれ、光のスフィアに囲まれて、説教壇の高いエリア全体が輝き、光っています。神殿の中央には、聖域があり、その正面には幕がありますが、それは今、上がっています。黄金の守護天使が立ち、手に両刃の剣を持って、前後に、動かしています。

[2] 注意深くこれらのすべてのものを見てみると、私の思考の内にそれぞれの意味が流入してきました。神殿は新教会です。真珠のようなものからできている扉は、新教会への入り口です。クリスタルの窓は、新教会を照らす真理です。説教壇はその聖職者と説教です。説教壇に開かれた御言葉と、その高くなった部分を照らすものは、御言葉の内的意味であり、啓示された霊的なものです。聖域が神殿の中心にあることは、新教会と天界の天使達の結合です。聖域に立っている黄金の守護天使は、御言葉の文字的意味です。手に持った前後に動く剣は、なんらかの真理に適用する限り、文字上の意味は変えうらということの意味をしています。守護天使の正面の幕が上がっていることは、御言葉が今や開かれたことを意味します。

[3] 後に、建物のそばにやってきたとき、扉の上に書かれたものを見ました。「今、許された:Nunc licet」

これは私たちが知性を使って信仰の秘義に入ることが今、許されたことを意味します。この記述を見て、利己的な心構えによって作られ、従って偽りから構築された信仰の独断的見解を産み出すため知性を用いることは、きわめて危険なことだという想いが私にやってきました。その独断的見解を補強するため御言葉からの記述を用いることはさらに悪いことです。そうするならば、最高レベルにある知性を閉じてしまし、そして次第により下のレベルも閉じてゆき、神学的な教えが厭うべきものとなり、ついには消滅してしまいます。それはまるで紙上の文字が虫によって食べられ、羊毛が衣魚によってだめになるのと同じです。そのとき、知性が働きうるのは、自分の住んでいる地方に影響する政治問題を扱う場合や、自分の仕事に絡む事柄や家庭に関係する諸問題に限られてしまいます。これらの領域では、偶像崇拜者が黄金の彫像を胸に抱くように、人は物質的な世界をいとおしみ、そこからくる魅惑的な快楽を愛します。

[4]今日のキリスト教会の教義は、御言葉からではなく、利己的な心構えから構築されていて、その結果として偽りによってできています。これらの教義は御言葉の中のなんらかの一文から確認されてもいます。その結果、主の神学的御摂理によってローマカトリックの平信徒から御言葉が取り去られます。そしてプロテスタントには御言葉は開かれてはいるものの、知性は信仰に服従しなければならないという広く流布された主張によって閉じられています。

[5]しかし、新教会においてはその逆のことが起こります。この教会では、自分の知性を使い教会のすべての神秘に進み、深く入ることが許され、発見したことを御言葉によって確認することが許されています。これが許された理由は、新教会の教えは御言葉を通して主によって啓示された連続した真理であるからです。真理を確認する理性的な推論は、知性を次々と最高のレベルまで開き、天界の天使が享受する光のうちにも高められます。この光は本質的に真理です。この光の中では、主が天地の神であるという知識は、その栄光の中で輝いています。これが「今、許された」と神殿の扉の上に書かれていることの意味であり、守護天使の正面の聖域の幕があげられていることの意味です。これは、偽りは知性を閉じ、真理はこれを開くという新教会の原理です。

[6]後ほど、私は頭上に小さな子供のような方が手に一綴りの紙を持っているのを見ました。近づいてくるにつれ、中くらいの背丈となりました。それは三界の天使から来た天使であり、そこではみな遠くにあっては、小さな子供のように現れます。私のそばに来たとき、紙を渡しました。しかし、その天界で用いられる曲がった文字で書かれているため、私はそれを返し、私の思考に合うような言葉でその意味を表現するよう求めました。すると答えて、「ここに書かれていることは『これより、それまで閉じられていた御言葉の神秘に入る。その個々の真理のすべては主を映す鏡である』」。